

おむつの選択と当て方に対する看護師の受けた教育別による行動変化

キーワード：おむつの選択、看護師の受けた教育、行動変化

○花野美奈子、山崎久江、小林真由美、佐久間あゆ美
新潟県立坂町病院

I 目的

患者の排泄状態に合わせたおむつの学習会を行っても、個人によって実践にばらつきがあることに疑問を感じた。武分は、「これまで多くの看護職員が受けてきた教育内容は経験知や伝承が優位にあったと思われる。その結果誰のために行う実践なのかを考えることなく、誰に対しても同じような対応で多忙な業務に追われ、その場をしのいできた傾向が少なからずあるだろう¹⁾」と述べている。本研究で学習会後に看護師の受けた教育別による行動変化が見られるか調査を行ったので報告する。

II 方法

1. 研究期間と対象者：平成23年6月～平成24年2月。同意を得た看護師。2. データ収集方法：1) おむつの選択とおむつの当て方の技術確認調査およびアンケート調査を学習会前と学習会1か月後に行った。2) 学習会を2回行った。1回目と2回目の学習間隔はエビングハウスの忘却曲線を参考に1週間とした。3. 分析方法：昭和43年には専門職としての活躍が求められ改正、平成2年には教育目標を「看護対象に適切な援助が技術の基礎的な行動を形成する」とし改正、平成9年以降では看護と介護の共通性と各々の専門性について考えた技術を追求し改正されたことから、昭和43年～平成1年(以下A群)平成2年～8年(以下B群)平成9年以降(以下C群)の3グループに分け単純集計した。

III 倫理的配慮

対象者に口頭と文書で研究目的、方法、研究参加の自由、参加による不利益は生じないこと、結果の公表と匿名性の保証を説明し同意書により同意を得た。尚、本研究は新潟県立坂町病院看護部倫理審査委員会の承認を得た研究計画書に基づいて行った。

IV 結果

対象者41名、教育年別で、A群は23名(56.0%)、B群は9名(21.9%)、C群は9名(21.9%)だった。全体の構成年齢は50代13名(31.7%)、40代13名(31.7%)、30代11名(26.8%)、20代4名(9.7%)だった。

全体の結果は「おむつの特徴と性能を理解して選んでいる」は6名(24%)から19名(76%)で前後の差が52%と最も高かった。次に「下痢対応パッドを使用している」は1名(4%)から12名(48%)で差は44%、「フィット性のあるものを選んでいる」は17名(68%)から25名(100%)で差は32%だった。教育年別結果でA群は「おむつの特徴と性能を理解して選んでいる」が1名(8%)から9名(70%)で前後の

差が62%と最も高く、次に「下痢対応パッドを使用している」が0名(0%)から7名(54%)で差は54%だった。B群は「排泄量に合ったものを選んでいる」が4名(67%)から6名(100%)で前後の差が33%と最も高く、次に「高分子ポリマー使用のおむつを用いている」が3名(50%)から5名(83%)で差が33%だった。C群は「おむつの特徴と性能を理解して選んでいる」が1名(17%)から5名(83%)で前後の差が67%で最も高く、次に「下痢対応パッドを使用している」が0名(0%)から3名(50%)で差が50%だった。技術確認の結果について「開閉式おむつの上側のテープは腸骨にかかるようにつけられている」が3名(30%)から9名(90%)になり学習会前後の差が最も高かった。

V 考察

アンケート全体の結果から、学習前よりも学習後に結果が良かった項目は「おむつの特徴と性能を理解して選んでいる」「下痢対応パッドを使用している」「フィット性のあるものを選んでいる」だった。おむつの特徴をまじえた学習会やエビングハウスの忘却曲線をもとにした学習間隔は行動の変化に効果的であったと考える。

A群では、学習会により排泄量の観察不足が漏れにつながるということがわかり、技術優先の教育を受けた年代の経験に知識が加わったため学習会後に「おむつの特徴と性能を理解して選んでいる」が上がったと考える。B群は、臨床で困っていたおむつ装着時の漏れが、学習会で患者の排泄状況を観察する知識を得ることにより根拠と技術が結びついたと言える。また高分子ポリマーを使用するようになったことは、患者の安眠を考え看護の対象者に適切な援助が行えるように教育されたことが影響していると考える。C群では、看護教育は疾患別の看護に標準化される傾向がある。また、この年代の看護師はA群の先輩から指導される事が多く、おむつの選択と当て方も、指導されたように継続していく傾向になると考える。

VI 結論

1. おむつの学習間隔を1回目と2回目を1週間以内とすることで看護師の行動の変化には効果的であった。2. 学習介入する上で、看護師の受けた教育年別による行動に変化がみられた。以上のことから看護師の教育年別傾向をふまえた学習会を計画・運営していく必要があると思われる。

引用文献

1) 武分祥子：看護の動向と今後の課題[その1]—教育カリキュラム分析を中心に—立命館産業社会論、2005。